

---

# Fate/ stay with murder

舞月朝影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/stay with murder

### 【Zコード】

Z6508Y

### 【作者名】

舞月朝影

### 【あらすじ】

三年間。虚月識は『』と向き合っていた。それは無と言えて無と言えず、有と言えて有と言えないもの。形容するならばアカシックレコード。直訳するならば死。三年の眠りから目覚めた虚月を待っていたのは、聖杯戦争という魔術師同士の闘いだつた。

「僕が、今度こそ聖杯を破壊するよ 切嗣さん」

作者「原作風に設定を小出ししていくので、原作を知っている人からしたら煩わしいかも知れません。どうかご了承下さい。」



「はじめ、ビニード。

僕の声が世界に反響する。けれど、周囲には何もなく、存在するものは無かった。

虚無に支配された空間。

無。

誰もいない、何も無い世界に、ただ一人、僕はぽつんと浮かんでいた。いつたいつから僕はここにいるのだろう。なぜこんなところに来たのだろう。それよりも、いつたいどうやって？

何も無い世界。そこに存在するのは、よくわからない何か。暗くて、深くて、冷たくて。それは嫌悪感を抱かせるものでありながら、どこか親しみ持てるものでもあった。

これが、死なのか？

わからない。解らない。判らない。僕には何も判別がつかず、ただ頭の中に流れこんでくる概念だけが僕の意識をつなぎとめていた。

これは、なんだ。

死。人々が世界にとどまれる時間を過ぎたとき、始まる、崩壊の始まり。

崩壊の終わりは　この、虚無に辿り着いた時だけだ。

＋ ＋

「……こじは、どじだ？」

目が覚めた。見上げた天井は真っ白だった。手を動かそうとする  
とズキズキと痛み、体中、痛みでまったく動かせなかつた。幸いに  
も痛みのない眼球だけを動かして周囲を見る。

僕の隣には、看護師さんがいた。彼女は横でじっと本を読んでいた。

あの、と声をだそつとしたが喉がうまく動かない。最後に声を発  
したのはいつのことだったか。僕には昨日のことのように思えたが、  
あの虚無にいた時間が解らない以上、記憶が確かであるかどうか確  
信はなかつた。

数十秒間、じつと見ていると目が合つた。どんぐりのよつに丸い  
目を見開いて、大いに驚き、詠嘆した。

「先生、先生！　虚月へへづきくくくんが目を覚ました！」

彼女は本を床に放り投げて、丁度部屋に入ってきた先生に駆け寄  
つた。先生は彼女より驚き、看護師さんと共に僕に歩み寄り、痛い  
ところはないか、どこか悪いところはないかと聞いてきた。

「体を動かすと、全身が痛いです」と正直に言つ。医者に嘘を言つ  
ても始まらない。

「そりゃ、君は運動していなかつたからねえ。筋肉が剥離しかかっているのだう。……しかし、他に悪いところはないのかい？」

医者は自分の言葉を一寸途切れさせ、僕の全身をまじまじと見る。それから、「もしないとしたらこれは奇跡だ。三年間も眠つていて少年が目覚めて何もなかつただなんて前例がない！」

医者は大喜びだった。そんな嬉々とした表情を曇らせたくはなかつたが、僕はどうしても聞きたくなつて尋ねざるを得なかつた。

「あの、……先生」

「どうしたね？ 虚月くん」

「どうして、落書きがされているんですか？」

「…………落書きや？」

先生は、途端に顔を顰めた。きょろきょろと周囲を見回して、「そんなものじこにもないじゃないか」と訝しげに答えた。けれど僕にはそれが信じられなくて、言わざるを得なかつた。

「だって、ほら。先生にも、看護師さんにも、壁にも、ベッドにも……線や点がたくさん書かれているじゃないですか」

見ていて、氣味が悪い。こんなものをずっと見ていられない。見ていたら、僕はあの虚無の世界を思い出してしまう。今思うと、あれは濃厚な死の塊だつたのだろうか。それとも、なんなのだろうか。感覚的には理解できたが、言葉に表すことができない。

それと同じだった。その「落書き」は一つ一つが脈動し、生命の躍動をありありと見せつけていた。特にその線の広がる中心である点は、命という概念を感じさせるほどだった。

医者は僕のそんな言葉を聞くと、「疲れているのだろう。今日はゆっくり休んで、明日また会おう。その時に詳しいことを聞いてあげるから」

そう言いながら、医者はゆっくりと僕から離れていった。手招きで看護師を呼び、歩きながら話をしているのが聞こえた。

「これは前例がある。確か×県の病院だったのだが、ある患者がそうだ、彼と同じくらいの年で、同じような症状を発したんだ。その子は退院後はちゃんとやって行けているそうだが、田覚めた当初は自分で自分の田を潰そうとしていた。

明日、その子の対処にあたった先生に来てもいいことにしてお。幸い、私は彼女の知り合いだからね」

「……その先生の名前は、なんといつのですか？」

「蒼崎橙子といつ名前だよ。患者の方は、黒桐式。田名は、西儀式だ」

## Prologue (後書き)

さて、最初の説明パートは飛ばしていくよー！

僕が次に目覚めたときは、橙子さんが病室に入ってきた時の小さな足音が響いた時だった。いつたい何年あっていいのだろうか、と思いながら上体を起こす。

今日は痛まない。なかなか回復しているじゃないか。

「おはようございます、橙子さん」

「おはよう、じゃない。……なんだ、起きられたのか。心配して損したじやないか」

僕が起きたことに驚きながら、彼女はため息混じりに呟つ。

「の人が僕を心配していた? ……馬鹿な。

そう思いながら、橙子さんの表情が真剣そのものだったことに気づき、本当に心配してくれていたことが嬉しかった。最後にあったのが……僕の感覚では一年前だが、実際には五年も経っている。彼女についてそれは長い時間だったのだろうか、と思いながら、足音まで覚えた彼女を見た。

とても綺麗な人だ。赤い長髪はポーティルにされている。いつも眼鏡をかけているのだが、今日はかけていなかった。いつもどおり、アイロンをかけたようにパリッとしているシャツにジーンズとこう格好で現れた橙子さんは、医者というよりもビジネスウーマ

ンに思えた。その美貌は、昔のままだった。

その全身に、落書きされたかのような線を引かれて。

開け放たれていた病室の窓から冷たい風が入り込む。ひゅう、と音を立ててそれは僕と橙子さんの間を通り抜けた。寒いな、といいながら橙子さんは窓を閉じる。その動作をしながら、彼女は僕に「お前のその”眼”さえなんとかなつたら、お前は今日中に退院できるそうだ」と言つた。

「へえ、随分早いんですね。式さんは一週間位必要だつたらしいですけど」

僕が口にした式という人物は、僕の従姉へいとこくわだ。いつも着物をきている、どこか割れ物じみた壊れやすさを感じさせる女性だ。昔は両儀という名前だつたが、今では結婚して黒桐という苗字に変わっている。といつても、僕が知っているのは両儀式ではなく、黒桐式だけだが。

僕の識る両儀式という女性は、僕の従兄にあたる黒桐幹也さんから聞かされている想い出話の中の人物だ。僕が魔術などを知つているということを知つてからは、聞かされることのなかつた彼女の戦いなども少しは耳にすることができた。

最終的に、全て惚氣話に変わつてしまつたが。

「おまえは何故か知らんが筋肉が全く衰えてなかつたし、寝てる間に剥離しかかつっていた筋肉がもうくつつきやがつたからな。医者からすれば奇跡といったところだが、まあお前の知る式の件もあるしな　私は驚かないがな」

ふふん、と彼女は鼻を鳴らす。けれどそれを言つたあとで、僕は苦笑した。

「じゃ、なんでその式さんと幹也さんを連れてきているんですか？」

僕はちらと病室の入口を見る。そこから、赤い着物の袖が覗いていた。それと、黒い外套の端が。

バレしてたか、といつて黒い外套の主 黒桐幹也さんが僕の前に姿を現す。以前あつた時とあまり変わらない感じで、上下が黒一色の服装で統一されていた。おそらく彼は黒っぽい服しか纏わないのだろう。

「ほら、式。せっかく従弟へいとこへにあつたんだから顔くらい見せたらいいじゃないか」

「……まあ、そうだな」

そう言つて、式さんは幹也さんに手を引かれて病室に足を踏み入れた。老いを感じさせない瑞々しい純白の肌と、それと対照的な真っ黒な髪。瞳は墨を流し込んだような、美しい黒をしていた。

珍しく、赤いジャケットを着ていない。見れば今日は裏地のある、ちゃんとした着物だった。着替えだけで何分使つたのだろう。

旧知の人物と立て続けに再開すると、感動も若干薄いものとなる。だが彼らが僕のために遠路はるばる着てくれたのだと思うと自然と表情がほころんだ。けれど式さんは僕に再会の挨拶の一つもよこさずに、その黒い瞳で僕を見据えている。

「なあ、シキ。　おまえ、何が視えている?」

唐突に、彼女は言った。その言葉に掛けられた圧を感じ、僕は医者に言つたように線と点が見えるということを話した。すると、それだけで橙子さんと幹也さんの表情が曇る。……なにか良くないのだろうか。それとも、別の原因なのだろうか。

思えば、なんの理由もなく橙子さんがこの二人を連れてきたことはない。つまり、橙子さんは僕のこの“眼”がなんなのか、検討がついているのだろう。

そしておさらく、解決策も。

「……シキ。お前が見ているのは　」

「死」と式さんの言葉を遮つて僕は答えた。「あの、真っ暗な中で僕はずつとあれと向かい合つてきたからね。ああ、あの気持ちは多分一生忘れられないよ。僕は　あそこには戻りたくないと思いつながら、あそこに戻りたいと願つてはいるんだから」

僕のこの言葉を聞くと、橙子さんと幹也さんはもつと暗い顔をした。それと対照的に、式さんは無表情のままだ。

そして、間を開けて彼女は言った。

「お前の見たものは、私の見たものと同じだ」

## Prologue third

式さんは、僕にすべてを話した。

そして、僕はこの目がなんなのか知った。

直死の魔眼。物事の終わりを見ることができる魔眼の一つ。それ  
の保有者は、この世界を見渡しても僕含め三人しかいならしい。

ひとりは、僕。

ひとりは、両儀式。

ひとりは、遠野志貴。

最後のひとりは失踪して今では所在不明になっているらしいが、  
最後の目撃情報は倫敦でかの真祖の姫と共にいた らしい。聖堂  
教会の情報だそうだ。

僕には魔術が使えないが、有名な退魔の家系に生まれたため、色々  
な所に名前は知れ渡っている。僕の家系はそちら側にはかなり名  
の知れた家である。両儀の家とはかなり昔から親戚づきあいをして  
いるんだとか。

そして、その一人息子の跡取り。七夜に並ぶ退魔の家系なのだから、注目されて当然であった。魔術協会、聖堂教会、アトラス院…有名所はもとより、小規模な魔術結社などにも「虚月」の名前は知られていた。それで僕は蒼崎橙子さんと出会ったのだが これ

は余談でしかない。

とにかく、式さんは眼を制御することに成功。ただそれまでは「魔眼殺し」の眼鏡を掛けていたそうだ。それも一時的で、すぐにやめたそうだが。

僕の魔眼の症状は遠野の息子よりも式さんのほうに似ているらしい。また、橙子さんの話によると「根源のどこかとラインが繋がってしまった」ということらしいが、それも含めて僕の身体的特徴は式さんに似ているのだ。血も繋がっているし、それを含めて式さんに教えを乞おうと思つた。

「式さん、この眼の制御法、教えてくれますか？」

話を終えてあまり間を開けずに言葉を発した僕に対し、式さんは驚きを禁じ得無かつたようだ。いつもは絶対に見せない困惑の表情を僕に向けながら、「おまえ、怖くないのか」と聞いてきた。

「怖くないと言つたら嘘ですけど、それよりも田先の問題を解決する方が先です。いい加減、この線だらけの世界にも飽き飽きしてきましたから」

「飽きた……か」

彼女はそう言つと、どこか優げに笑つた。その瞳は、慈愛に満ちたものにみえた。

まるで、同類を見るかのような

制御法の殆どを教えてもらつたが、ほとんどが感覚的のことだつたので、僕は自力で制御することに決めた。

「それじゃあ私は、お前がもう退院しても大丈夫だということを言つてくる。それまで黒桐が持つていてる眼鏡をつけておけ。それが魔眼殺しだ。なんならやるぞ」

いつぺんに全て言つてから、橙子さんは部屋をでた。シーツの下から足を伸ばし、ベッドから以前と変わった様子もない足を抜く。その足で、恐る恐る地面を踏む。

痛みはない。僕はすでに動ける状況にあるようだ。そんな僕を見て、「オレの時は一週間も動けなかつたのに」と呟いたため、僕は苦笑を漏らさざるを得なかつた。ひんやりとした床の上を裸足のまま歩き、幹也さんから眼鏡をもらい、それを掛ける。

途端、線は消えた。　　ああ、これで少しの間は安心だ。そう思  
いながら僕はふとした疑問を彼らに言つ。

「えりと、おれと幹せんせーじに泊まることですか?」

「ああ、オレたちはホテルをとつてある。……ま、橙子は自分でどうにかするだろ?」

「うん」とは、橙子さんは泊まる場所がないんですね。今のと

それさえ解ればいいのだ。と思いながら僕はベッドに腰掛けた。

た。

式さんから制御の方法を教わり終えた頃に、医者が来て言つには退院して良いそうだ。僕が当時着ていた藍染めの浴衣を受け取り、式さんと橙子さんに病室を出てもうひとつから着替えを済ませる。すでにひとつで着替が済ませられるほどに回復していく、案外これら先苦労はしないかも知れない、と思つた。

式さんと幹也さんは病院に近いホテルだそだから、退院してからすぐ別れた。それから、橙子さんに宿を尋ねた。

「え？ ……泊めてくれないのか

まるで当たり前のことを要求するかのように橙子さんはいった。もとよりいちらもそのつもりだったので一つ返事で承知した。恩は恩で返すのが礼儀というものだろ。僕は橙子さんの車に乗せてもらって、三年ぶりに自分の家に向かうことになつた。

三年ぶりと云つても感覚的には一田ぶりである。変化していないことを望んでいたとき、ふと橙子さんが思い出したかのように僕に笑いかけた。「それにしても、君も隣に置けないな」

「え？」

こつたいなのじと話をしているのだらうか、と思ひ僕は間抜けた返事をする。

「見舞い客だよ。じつは毎日来てるようだよ。名前はなん

て言つたかな、遠坂、だつたつけ

橙子さんはハンドルを切りながら答えた。このルートだと深山町へと進行している。だんだんと見慣れた街並みになつてきた。遠坂、という名前を聞いて十字路を右に曲がった先にある真っ赤な屋敷を思い出しながら僕は驚愕した。

「遠坂、つて遠坂凜ですか？」

「そう、その娘だ。毎日毎日、自分の時間を惜しんでこいつらのいいか。なんだ、恋人か？」

「いえ、そんなわけじゃあないはずなんです、けど……」

遠坂さんには以前お世話をしたことがある。言峰教会の神父からの頼みで、僕が稽古をつけてあげたのだ。あの少女は今どうしているのだろうか、と思いながら僕は動く景色を眺めていた。

しばらくして、十字路に出た。ここから坂を登ると西洋屋敷が立ち並ぶ町並みへとなり、左へ曲がると和風の家が立ち並ぶ町並みになる。そういうえば、僕の隣に住んでいた士郎君は今頃どうしているだろうか。そうすると、今まで僕に会ってきた人物の顔が次々と思い出され、今頃どうしているのだろうかという、なんともいえない気持ちになった。

「……そういえば、識。お前、一人で暮らせるのか？」

「ああ……そういえば、両親はもういませんでしたね。まあ、経験はありませんけど……いやと  
なつたらお隣さんに助けを求めますよ」

笑いながらそういう。士郎君は料理がとても得意で、彼の父衛宮切嗣をいつも満足させていた。切嗣さんはが死んだのと同じ時期に僕の両親も死んだのだったと思い出した。ということは、彼が居候を連れてきていない限りあの家で今でも一人暮らしを続けるのだろう。

僕と違つて人徳のある子だから大丈夫だと思つが。

「まあ、無理はするなよ。なんなら一週間位お前のところにいてやうか。寂しいだろ？」

「大変嬉しいですけれどお断りします。僕はこいつ見えてけだものですよ」

からかうように僕は言ったが、橙子さんは「それを承知のうえだときつぱりと言つた。驚いたが、明日には帰つてもらうこととした。

++

血牛にたどり着いたあとのことは特に何もなかつた。あつたしたら、橙子さんが今晩中に帰ると言い出したくらいだ。だから僕は眼鏡を貰つていいかということを聞き、それについて承知されてからもうもろの件に関してお礼を述べた。橙子さんは、「よせよせ」といつて煙を払つように顔の前で手を振つたがまんざらでもなさそうだった。

そののち、橙子さんと別れ、僕は就寝した。

明日からは学校があるのでどうか、と思いながら。

青年のナイフが素早く動く。対立する鬼のような大男の体に無数の切り傷が刻まれる。それに対し男は、拳に煉獄を纏わせて拳を繰り出す。それをすべて避け、目にも留まらぬ動きで辺りを高速移動し、その度に敵の体には傷がつけられる。

まるで、蜘蛛のようだと思った。

大男は、倒れない。ある時は灼熱を生み出し、ある時は青年を焰のまとつた拳で殴り、 その光景は、炎鬼ゝゝえんきゝゝという鬼を思い出させた。

彼らは、殺しあう。

殺し合つて、殺し合つて、殺し合つて

最後に、大男の腕が青年の心臓を穿つ寸前の頸動脈を断ち切った。

敵は、白い粒子となつて散つていぐ。青年はそれを見ながら、悪鬼のような表情で言った。

「また消えるのか 紅赤朱、あの夜のようにな、オレの前から姿を消すのか！」

その叫びが響き渡つたときには、青年もあの炎鬼のよじて光の粒子となつて消えていた。

はつ、と田が覚めた。重たい瞼をこすりながら僕は布団から抜け出し、朝食を作ろうかと思い台所に向かつ。清々しい冷気が僕の眠気を吹き飛ばしてくれたおかげで、今日一田は動き回れそうだ、と思つた。小鳥の騒ぎを聞きながら、僕は台所に立つ。

別れ際に、式さんに渡されたナイフ。これを一体どうしようかと思ひながら台所の前に立つ。

……けれど、料理を作るやる気が起きない。よく考えたら食材がないじゃないか。溜息を付いて、士郎君のご厄介になりますかと腹を決めた。土下座でも何でもしてやるひではないか。

半ば自棄へやけくになりながら、僕は自室へと戻り、制服に着替えた。穂群原高等学校の制服であるベージュ色の学ランとズボンを身にまとつて僕は戸締りをし、お隣さん　衛宮士郎の家へと出かけていった。

もちろん、式さんからもらつたナイフは忘れなかつた。

徒歩五秒。とりあえず大きな門を叩くが、誰も出る気配がない。

「……よくよく考えたら、こここの屋敷は云々さて誰も出るはずがないじゃないか」

笑つて、僕は黙つて中へと足を踏み入れた。

女性特有の甲高い声が、バイクの音と共に聞こえてきた。振り向くと、そこにはバイクに乗ったボーイッシュな天然教師

「藤村先生、なにしてんですか！？」

僕は慌てて半歩下がつてバイクを躲すと、すぐにそれに飛び乗つた。自然、藤村先生の後ろから覆いかぶさるような格好になる。

「さやー！ ちょ、ちょっと君！」 「先生はちょっと黙つて！」  
ブレー キが解らないんですか、アクセルを踏まないでください右  
折しようとしないでください！」

僕の言葉に鬼気迫る者を感じ取つたのか先生は静かにして、アクセルから足を外してくれた。僕はブレーキを掛け、ゴムの擦れる音を響かせながら止まろうとするバイクから足を伸ばし、スパイクの踵で地面を削りながら失速の手伝いをした。

バイクが止まり、そこでようやく僕は藤村先生から身を離し、地面に足を付いた。安堵の溜息をつく。

「……藤村先生、何をしたらこうなるんですか」

「え、つと、あの、」

「先生はいつもこうでしょ。衛宮の機械類を触るなと言つたら触るし、あいつの修理の邪魔はするかと思つたら僕の料理まで邪魔し

たりして、構つて欲しいのはわかりますけれど

「あのー、どうぞまでですかー！」

僕の話を遮つて、先生は大声を上げた。その様子に僕は驚き、もしゃ解つていないのでどうかと思った。昨日鏡で顔を見たが、三年前と変わったところはなかった（はずだ）。それとももしかして、もう人の事を忘れているのだろうか。

「忘れたんですか？ 貴方の大好きな弟分の、虚月識ですよ。タイガーなのに鳥頭ですか」

僕がそれを言つたときには、背後に土郎君と、もう一人誰かがいた。時刻は午前六時四十五分。土郎が起きていても不思議ではない時間帯だ。

そんなことを思つていたから、僕は藤村先生の様子が全く解つていなかつた。

「 識！ もう、死んだかと思つてたじやない！…」

先程の三倍ほどの声を上げて、先生は僕に飛びついた。ジャンピング抱きつきである。あまりにも唐突で全体重をこちらにかけてきたため、僕は為す術も無く藤村先生に押し倒される。ぐつ、とつめき声を漏らしたが、先生の耳には届かない。

「三年よ二年！ もう、あの事故で倒れたあと、私がどれだけ心配したと思つてるのよ！」

「あの、せんせー」

「いいわ、タイガー扱いも許す！ ええーい酒持つてこーい！ 識  
が帰ってきたぞーっ！！！」

まず落ち着いてくれ。僕はそう思いながら、僕を見下ろしている士郎君を見る。その件の士郎君は僕に頬擦りまでしている藤村先生の様子にあっけに取られた様子もなく、ただ僕を見つめていた。隣に立つ紫髪の少女も同様である。

「 識兄へへシキにいへへ！？ いつ退院したんだよー。」

「士郎くん頼む、こいつどけて！」

藤村先生に押し倒された状態の僕を見て目を丸くする彼に、僕は必死の思いで頼み込んだ。

直死の魔眼／?  
c h a p t e r o n e (後書き)

「都合主義っぽいなー。  
下手だね、どうも。」

## 直死の魔眼／？ chapter two

僕の復帰は三人に歓迎された。紫髪の少女 間桐桜とも面識のある僕は、衛宮ファミリー（僕命名）に認定されているようだつた。朝食を貰いたいと言つたら是非と元気のいい返答をされ、そのままVIP待遇を受けた。いつにもなく、三人がハイテンションである。

さて、料理を待つ間何をしようか……

僕は少し考え、藤村先生　いや、藤ねえといつたほうがいいだろ？　藤ねえと想い出話に耽ることにした。

「それにしてもさ、藤ねえ」

「ん～なになに？　私は今どつても氣分がイイから何でも聞いてあげる。特に識の話はね」

「最後に藤ねえが僕にキスをしたのは僕が小学六年生の頃だつたよね」

「なつ！？　ななな、なんで覚えてるの！？」

僕は爆笑した。

台所からは、士郎が吹き出す音が聞こえた。

藤ねえの顔からは、湯気が立つていた。

あの時の思い出は忘れよつても忘れない。酔っ払つた虎は手

に負えないと思いつた時である。その後自分の行ったことに対する羞恥で、一週間ほど僕と顔を合わせることもできなかつたんだつたか。

「僕はいろいろ覚えてるよ。……それにしてもどうしよう、今日、学校あるの？」

「話題の転換が早いわねえ。まああるわよ。識は私のクラスだから、実質転校生みたいな扱いになるかもね。ＨＲで自己紹介でもする？」

「うん。……高校三年生までの勉強、終わらせておいてよかつたあ」

「あー……そのことは当時、驚いたわ。もともと高認とつて大学に行くつもりだつたんでしょ？」「う？」

「まね。けど、中学校の間に高校一年までしか終わらなかつたから諦めた。あと一ヶ月あればなあ」

「識、本当に頭いいわよねえ。……こりや、今までの内申を一気にいいものにすることができるかもね。識なら」

「テストで満点を取ればモーマンタイ。簡単だよ」

簡単つていつた人、はじめて見たわと藤ねえはテーブルに突つ伏していった。上目遣いで、頬杖をついている僕を見上げて、

「……よつし、先生と一緒に学校に行きましょ？」

「いや、士郎君と行くからいいよ」「いいえ、貴方は私と来るんです。色々あるんだからねー手

伝つてもうひつわよ~「

藤ねえは、とても張り切つていた。こりや歓迎パーティーでも開かれるかもな、と思いながら僕は運ばれてくる料理に期待した。

++

とりあえず、僕が学校に登校してから下校に到るまで、僕は様々な人物と再会を果たした。柳洞一成、美綴綾子、穂群原三人組、：旧知の後輩が同級生というのも変な感じだが、年上として認識されているだけまだいいだろう。

しかしそれでも、遠坂凜には出会えなかつた。

……そつ、出会えなかつたのだが僕は今、彼女と出会つてゐる。

たまたまだ。下校しようと鞄をとつて、廊下に出たら彼女がいた。

視線が合つ。彼女は息を呑んで、僕の復帰に驚いていた。それが他の人物の驚き方とは違つ、安堵の混じつたものもあり、しかし若干恐怖を含んだものもあることはすぐに見抜けた。初め僕なんと声をかけたらいいか解らなかつたが、取り敢えず声を掛けることにした。

「……久しぶり」

夕焼けに照らされる廊下。

「……お、お久しぶり、です

虚月先輩」

「凛ちゃん。お見舞い、ありがとうございます」

「え？」

僕は彼女に向かって微笑んで、また明日と手を振った。下駄箱では土郎君が待っていることだろう。僕は急ぎ足になりつつあつたが、彼女の「待つて！」といつ叫びによつてその歩みを止められた。

「どうしたの？」振り返ると、遠坂凛はどこか不安を持った表情で僕を見ている。

「わ、私を 許してくれるんですか？」

「……許すも何も、君は何か悪いことをしたのかい？」

僕がそう言つと、彼女は驚愕して僕を見る。「覚えてないならいいんです。思い出さなくて」「彼女は懇願するように言った。夕焼けに照らされていても、彼女の顔は暗かつた。彼女がそこまで言うのだったら思い出してほしくない何かなのだろう。それならば、思い出さない方がいい 」 そう思いながら、僕は改めてまたね、と声をかけて立ち去った。

## 直死の魔眼／？ chapter three

その日のその後にあった出来事は特に無かった。ただ単に、僕は自宅へ帰ると通帳と財布を持ってきて自分の財産を確認するため、また生活費を確保するために銀行へと向かつたくらいだ。

商店街に行くと、会う人会う人が驚きの表情を見せながら、僕に色々な言葉を投げかけた。慰みの言葉や、励ましの言葉。その他にも色々あつたが、彼らは昔のままに僕を受け入れた。

今日の晩ご飯は魚料理だひやっぽい、とテンションを上げながら僕は帰路につき、その日は晩ご飯を食べて、寝た。その次の日もほとんど同じルーチンで、士郎の家に行き、学校に行き、食材を買い、寝る。その間に僕は過去の僕の友人らと再開し復縁していった。みんなは僕が驚くほど昔のままに接してくれたのがとても嬉しかった。

それが数日続いて

僕が目覚めてから六日後のことだった。商店街で魚屋のおじさんに値段交渉をして、一百円値切ることに成功し魚を買った直後に士郎がやってきた。彼の両手にはパンパンになつたビニール袋が提げられている。僕はそれを一瞥して士郎に視線を向けた。

「やあ

「よつ」と士郎は愛想のいい笑顔で答えた。「識兄も買出し?」

「まあそんなところだね。……にしても大漁だなあ

僕は彼の持つている食材を詰め込んだビール袋を見ていった。士郎は微笑を浮かべ、返事をする。

「よく食べる虎がいるからな。識兄もくる?」

「つーん、どうじょつか」

顎に手を当てて、齒む。食材は冷蔵庫に入れておけば安心だが、世話になるところのもどこか気が引ける。

僕は 敢えてここは帰る足に任せて晩ご飯を「うそうそ」になることにした。折角のお誘いだから、乗らなきゃ損と思いながら僕は首肯し、彼の家へと向かった。

その日の晩ご飯は大いに盛り上がった。久しぶりに藤ねえと士郎と共にする食事はいつもより美味しく感じた。桜ちゃんは僕に大盛りのご飯を注いでくれて、どうやつて食べようかと僕の頭を悩ませてくれた。それに比べて僕よりも多めにつがれたご飯をモノの数分で平らげ、「おかわり!」と元気よく桜ちゃんに要求する。

そんな光景を士郎と共に笑いながら僕は見ていた。

と、ぱくぱくと料理を口に運んでいた士郎がふと思い出したように声をかけた。

「なあ、識兄」

「ん?」

「これから、どうするんだ?」

質問の真意がわからないが、取り敢えず答えたことにした。

「家に帰つて、それから寝て……明日は学校にいくだけかな。いや、明日は休みか。ならどうするかな……」

ふんふん、と土郎は熱心に話を聞く。やけに食いつきがいいな、と思いながら僕は日常の生活ルーチンを話した。すると彼はうつむくとお坊さんのように唸ると、

「なあ、ここに住めば色々と手間が省けないか?」

「あー……確かにそうかもね。良い提案かもしれない。僕が一人暮らして変に無駄遣いするよりも、監督してくれる人がいたほうがいい。……勿論、一人は自宅からここにきてるんだよね?」

「ああ、そうだよ」

土郎から返事がきた。桜ちゃんは朝からこっちに来ているらしくて、なんとまあ健気なこと。邪魔しちゃ悪いとは思うが、他人より自分、不便より便利。

「それなら、確かに一緒に住んだほうがいいね」

かくして、僕はこの家に居候することになった。僕が土郎から聞いた、生まれて初めてのわがままであったし、嬉しくもあった。

藤ねえも、藤村大河という教師の立場で了承してくれたが、ただ

一人桜ちゃんだけが反対した。決まったときには小声で「もしものことがあったら……」と言つて顔を赤らめていたが、あれほどのような意味なのだろうか。まさか何か想像しているのか、と思いながら僕は後輩の女子（いかがわしい妄想が大好きな子だ）を思い出す。

……うん、桜ちゃんはそんな子じゃないと僕は信じている。

僕は土郎くんに部屋を一つ貸してもらひた。そこは切嗣さんの部屋だった。

「まだ何も手をつけてないから親父の荷物だらけだけど、勘弁してくれ」

他に部屋はありそだが僕がここを指定した。それだとうのに謝つてくる土郎君はとても律儀だ、と思う。その律儀くんに僕は「こっちのほうがやりやすいからなにより」と返事をして、おやすみとあいさつを済ませた。既に隣の部屋から僕が持っている武器や礼装は持ってきていたため、魔術師の工房である部屋をえることは僕にとって幸運だった。

だが、そこで少し疑問が湧いた。自身の父親の部屋が、一種の魔術工房化していることを彼は知らないのか？

あの様子だと、その通りだ。

「教えたのか

あの人らしいや、と僕は思った。敷いてあつた布団に入り、ぼくは深い眠りについた。

真夜中に田が覚めた。なぜかは解らない。が、僕は危険を察知した獣のように目を見まし、足の思つままに道を歩いていった。暗い道を、僕はゆっくりと歩く。まとわりつく闇を払うよし、僕はナイフを握った手を振るひ。

数々の血を吸ってきた わけでもないが、ただ一人の男を殺めたこの白刃を、僕はお守りのように持ち歩いている。それは、いつどこで敵に狙われてもいいように、という心境からと、願掛けめいた、「これを持っていれば大丈夫」ということからだ。

それとも、僕は 虚月識は、敵を求めているのだろうか。

解らない。

わからない。

果たして、敵はそこにいた。「それ」そのものは敵ではなかつたが、それに付き添っている大男は、僕の敵だ。

「 久しぶりだね、イリヤスフィール。切嗣さんへの憎悪はなくなったかい？」

「三年ぶりね、シキ。キリツグへの恨みの代わりにあなたに対する憎悪なら以前の倍になつたわ

上

純白のような少女 イリヤスフィール・フォン・アインツベル

ンは僕にそういう。確かに恨むのも無理もない。それまで切嗣を殺すという憎悪だけを頼りに生きてきた少女にとっては、衛宮切嗣といふ男が最後までイリヤスフィールという実の娘を愛していたという真実は酷だったかもしれない。そうしたほうが、純粋な殺意だけで生きてこれたのだから。

彼女の表情は、以前よりも大人びていた。成長した様子はないものの、内面的な成長はとても大きかったようだ。僕は彼女の浮かべる、朧月のような淡い微笑を見ながら、ナイフを鞘から抜いた。

「 僕は聖杯戦争には関係ないはずだが」

「あら、気づいてないの？ 貴方の右腕 聖痕>>ステイグマ<<が刻まれてるわよ。マスター候補を殺すことはマスターの当たり前の行動もあるし、貴方を殺すことは私の悲願になりつつあるの」

純白の隣に立つ、岩石のような大男が白い吐息を出す。霧雨氣同様の褐色肌に彩られたその肉体は、腰に巻かれた布で秘部を隠されているだけではほかは裸だ。そして……その右手には、岩を削りとつただけの大剣が握られていた。

「やつちやえ、バーサーカー」

斧としても使えそうなその剣を構えて、その大男は咆哮した。

「 あ 殺し合おう」

僕は、歓喜してそういった。



## 直死の魔眼／？ chapter four

虚月識の両目が紅く輝く。その瞳は伝承に伝わるそれ　直死の魔眼そのものだった。月光に照らされたそのナイフは本来の持ち主よりも、現在の持ち主に似合つて見えた。藍染めの浴衣に似た、動きやすそうな服装をした彼は時代錯誤にもほどがあるだろう。

だが、そのことはどうでもいいこととして扱われる。その佇まいは一種の神秘性を放ち、まるで遙か高みにいる『何か』のような性質を醸し出していた。

それが、少女には氣に食わない。靈格として識を圧倒的に上回るバーサーカー　英靈を使役していながらも、彼女が彼を恐れる点はそこににある。

相手が誰であろうとも、氣にせず殺しに来る。彼が戦闘を行うときには思考されるのは敵をどのように解体するかということだけである。

その彼が直死の魔眼という最凶の魔眼を持つていてそれを先日知つた彼女は、あまり時間はかけられないことを判断した。

聖杯戦争が本格的に始まる前に、バーサーカーの『十一の試練』へゴッドハンド「」を司つつかさどく「点」を突かれえなく敗退するわけにはいかない。それではアハト翁への面子が立たないというものだ。

そして、イリヤスフィールは識が少なからず魔術回路を持つていることを察知していた。下手をすれば何かの要因で戦闘中に召喚が

行われるかもしない。

そうなれば、この男が最優と言われる「セイバー」のランクを持つサーヴァントを呼び出すことは眼に見えていた。それほどまで強力な人物であると、彼女は疑わなかつた。事実、彼女との前回の邂逅において彼は、彼女に会うためだけにAINツベルン家の総本山を叩きに来たのだから。

そして、立ちふさがる敵を全て屠り、彼女に会つたのだ。それが彼女には信じられないことでもあつたが、識の能力を裏付けするにはそれだけでも十分だろう。

「…………！」

バーサーカーが叫び、識に突進する。その速度は音速に達するかと思えるほどだつた。識に肉薄したバーサーカーは、横薙ぎに大剣を振るう。

だが、それはいとも簡単に回避された。識の表情には笑みさえ浮かべられている。それが、彼が以前よりも強くなっていることをはつきりさせていた。

サーヴァントというのは人間とは全く違う存在だ。本来なら触れることができない靈体である。そして、その正体は生前、伝説によるほどの功績を上げた『英雄』だ。そしてそれは聖杯戦争の要となる聖杯のバックアップを受け、生前よりも強化されて召喚される。

このバーサーカーは全サーヴァントの中でも最強と言える力を持っている。ただでさえ圧倒的な戦力を、『狂化』によつてさらに凶悪なものにしている。理性を奪うことにより本来よりも能力を底上

げするといつものだ。

本来これは弱いサーヴァントに使われるものが、アインツベルン 始まりの御三家と言われる聖杯戦争の古参の一つは、それを最強と言える存在に使用した。

その力は圧倒的。

それを上回る速度を見せた”人間”は、迷わずバーサーカーの右腕に走る『線』を断ち切った。そしてそのままカウンターとして、バーサーカーの左拳を受けることになる。

けれど、その拳さえも識は躱した。

振るわれた正拳に飛び乗つて、彼はそのまま左手の先の線も断つ。

一秒の間に、彼はバーサーカーの両手の機能を停止させた。

「！」

切り落とされた左手と右腕。バーサーカーはそれを痛がる様子もなく、強烈な頭突きを識に浴びせた。それを防御したが、それだけで識の左腕は砕けた。だが左手一本の代償に命が助かるのだから良い、と識は判断する。

砕けた腕からは血が吹き出している。自らの軌跡が魔法陣を描いていることに識は気付くことはなかった。イリヤスフィールでさえ気付くことができなかつたのだから魔術師でもない彼が気付くことができるはずはない。

「 斷ち切る！」

瞬間、識の姿は消えた。そして、白刃が煌めきバーサーカーの首筋を斬りつけ、通りすぎる。ザザザザザ、と大きな音を立てて彼はブレークをかける。目に映らない速度で彼は駆け抜け、そして、また駆けた。あまりにも直線的な攻撃は、しかしバーサーカーでさえ捉えることはできない。

業の壱。虚月の一族に伝わる業の一つ。七夜の体術に似ているとも言われるが、それを圧倒的に上回るほどの速度、威力を持つ。

蒼い閃光は何度も何度もバーサーカーを斬りつける。その間にもバーサーカーの両腕は回復していくが、回復していく合間合間に別の部分の”死”を断ち切られる。

その姿は、人間。

その刃は、神速。

月光すらも翻弄していた彼は、単純なスタミナをセーブする為にその攻撃をやめた。既にバーサーカーの武器は捨て置かれている。それを使う分だけ自らの速度が敵に劣っていくことを彼ははその本能で読み取っていたためだ。そのことを思い、識はバーサーカーの手が自分に伸びる前に距離を取れると確信していた。

だが、その一瞬の静止を狙つて、バーサーカーはその両手を伸ばし 捉える。

万力のような握力に耐えるために、識は歯をくいしばる。どちらかの手が使えればよかつたのだが、残念なことにすべての機能を止

められていた。骨がみしめしと音を立て、識は顔を歪める。バーサ

ーカーは彼を、地面に叩きつけた。

ぐひゅう、とこゝ音と共に彼はたたきつけられた。それでもなお生きていこむことがイリヤスフィールにも、彼自身にも驚きだった。

「ああ、お前はオレを満たしてくれるんだな。

なんて幸運だ。オレは田覓めてからすぐに、戦える！

みたせ、みたせ、みたせ（閉じよ、閉じよ、閉じよ） 我が欲

望を、我が殺戮衝動を、我が全てを満たせ！

ここに契約しよう。 オレは、お前を犯へへへへへす。その肉片までもしゃぶりつこいやひのじやないか

そして、魔法陣は起動した。識は自分の言葉が聖杯戦争のサーヴアント召喚の言葉になるとは思つてもいなかつた。だが、この現状を打破するにはそれが一番確実であるということを思えば、彼にとってそれは幸運であつた。それに対して、イリヤスフィールは己の失敗に表情を歪める。

まさか、このようなタイミングで、しかも偶然呼び出されるとは思いもしていなかつた。即座にバーサーカーに攻撃させよつかと思つたときには、もう遅かつた。

あたりに立ち込める煙の中から、芒とした輪郭が浮かび上がつた。希薄なそれはだんだんと濃くなつていきた。

「オレを呼び出したのはお前か？」

それは、とても現代風の格好をしていた。服装は紺色の学生服の上に真っ黒な外套を羽織っている。あまりにも不釣合なその格好をした青年の両手には黒い棒が握られていた。そして、それには七つ夜という銘が刻まれていた。棒に銘が刻まれていることに違和感を覚えた識は、それが飛び出しナイフだということに気がついた。

「もしもそなならば、初めまして、我が麗しきマスター。  
しがない殺人貴を」指名頂き、どうもありがとうございます」

演技じみた、仰々しい動作で彼は深々と頭を垂れる。そして、その顔を上げた。

その青い双眸は、欄<sup>ハハ</sup>うんくくと輝いていた。

それは、識の真逆。

「そして、純白の人外と古代の英雄よ。

「よし」と、蜘蛛の糸で作られた惨殺空間へ

彼は、薄く笑みを浮かべた。

**直死の魔眼／？ chapter four (後書き)**

**【クラス】**  
バー サーカー

**【マスター】**

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

**【性別】**  
男性

**【身長・体重】**

253cm・311kg

**【属性】**

混沌・狂

**【真名】**  
不明

**【宝具】**  
A A B A A A +  
**【敏捷】**  
A  
**【幸運】**  
A  
**【耐久】**  
A  
**【魔力】**  
A  
**【筋力】**  
A +

**【クラススキル】**

狂化：B

理性を代償として能力を強化する、バーサーカーを特徴付けるクラス別能力。ランクBなので、大半の理性を失う代わりに全ての能力値が上昇している。

### 【保有スキル】

戦闘続行	：	A
心眼（偽）	：	B
勇猛	：	A
神性	：	A <sub>+</sub>
：	：	

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6508y/>

Fate/stay with murder

2011年11月24日21時01分発行